HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自殺リスク評価ツールの開発に向けた基盤研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	高信, 径介
Description	配架番号：2612
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	甲第14493号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81842
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Keisuke_Takanobu_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（医　学）　　氏 名　　高　信　径　介

主査　教授　　髙　橋　　誠
審査担当者　副査　准教授　倉　島　　庸
副査　教授　　荒　戸　照　世

学 位 論 文 題 名

自殺リスク評価ツールの開発に向けた基盤研究
（Basic Research for the Development of Suicide Risk Assessment Tools）

この論文で申請者は、自殺の高リスク者を同定する評価ツールの開発を目的として 1）申請者の研究グループが作成した自殺リスクアセスメントシートによる精神科入院患者の自殺リスクの後方視的評価、2）抑うつ症状スクリーニングツールである PHQ-9 による大学生の自殺リスク評価、3）パーソナリティ特性の評価尺度である TCI による大学生の自殺リスク評価の 3 つの研究を論じ、評価ツールの組み合わせにより自殺リスクの高い学生を同定できる可能性を示唆した。

審査にあたり、まず副査の荒戸教授から、学位論文として 3 章から構成されているが、研究対象の異なる第 1 章と第 2、3 章の関係性について質問があった。申請者は、3 章とも広く自殺リスクを評価するためのツールの研究であるが、そのうち第 2、3 章では PHQ-9 および TCI といった既存のツールでの検討である一方、既存ツールでは検出できない因子を検討するため、自施設で作成した自殺リスクアセスメントシートでの検討を第 1 章として配置したと説明した。荒戸教授から、自殺関連行動の発生に寄与する自殺リスクアセスメントシートの個々の因子の解析やそれに基づいたシートの改良の方向性ついて質問があった。申請者は、今回の後方視的検討では、自殺リスクアセスメントシートの記載方法の煩雑さがあったことからそれを修正し、かつ自殺関連行動が見られた 37 例の解析で自殺関連行動発生への寄与が少なかった因子を除いた改良シートを用いた新たな前向き研究が進行中であると回答した。さらに荒戸教授から、自殺リスク評価ツールとしての PHQ-9 と TCI の優位性について質問があった。申請者は、自殺リスクである抑うつ症状や自殺関連念慮の検出は PHQ-9、TCI とも可能であったが、TCI を解析した第 3 章の研究では、研究デザイン上 TCI を正確に評価するために研究開始時点で抑うつ状態のない集団を解析していることから、抑うつ症状や自殺関連念慮の新規発生の予測能としては TCI の方が高いと回答した。第 2 章では、PHQ-9 で評価する抑うつ症状そのものが自殺リスクとなるかを解析するため、研究開始時点で抑うつ状態にある者を除外しなかったと説明した。

次いで副査の倉島准教授から、第 1 章で用いられた自殺リスクアセスメントシートの作成方法について質問があった。申請者は、自殺のリスクファクターとして既知のものを組み合わせてパイロット版を作成し、数ヶ月の試用の後評価を行いブラッシュアップしたと回答した。倉島准教

授から、第 2, 3 章の調査において対象者の参加率が結果の解釈に及ぼす影響について質問があった。申請者は、この研究の限界の１つであると回答した。さらに倉島准教授から、３章で構成される意味、第 2、3 章の結果から導き出される考察についてより詳しく記述すること、最終的に自殺リスク評価ツールの開発には至っていないことから、論文題名を再検討することが望ましいとのコメントがあった。

次いで主査の高橋教授から、この学位論文の目的ならびに得られた新知見について要旨の確認があった。申請者は、自殺リスクの評価ツールの確立を研究目的とし、3 つの評価ツールを検討した結果、いずれも自殺リスクの検出力は確認できたが、陽性的中率が低くスクリーニングにはまだ不十分であることが分かったと述べた。高橋教授から、陽性的中率を高める戦略について質問があった。申請者は、TCI によって検査前確率を上昇させた上で PHQ-9 を実施するなど、評価ツールを組み合わせることで陽性的中率を高めることができると考えていると回答した。さらに高橋教授から、PHQ-9 による抑うつ症状アルゴリズム診断や自殺関連念慮の推移で改善が見られていることについて質問があった。申請者は、入学時点での有症状者への治療介入やドロップアウトの影響も考えられ、この研究の限界であると回答した。

申請者は、各審査員のコメントに従い、論文題名を改め、各章の関係性を明確にするため緒言、考察および総括を修正追記した。

本論文は、臨床応用に向けて 3 つの評価ツールの自殺リスクの検出力を確認した価値ある研究である。また第 3 章の内容については国際自殺予防学会で発表され、既に英文学術誌に投稿されている。

審査員一同は、これらの成果を評価し，大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ，申請者が博士（医学）の学位を受けるのに充分な資格を有するものと判定した。